



Data

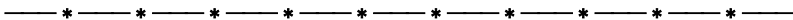
監督: 杜汶澤 (チャップマン・トー)
出演: ステフィー・タン (鄧麗欣)
/ チャップマン・トー (杜汶澤) / 倉田保昭 / ダダ・チェン (陳靜)

👁️👁️ みどころ

柔道や空手は日本発祥の武道だが、そのルーツは中国？そう考えると、日本の巨匠・黒澤明を敬愛している多くの中国、香港の監督たちが、彼の『姿三四郎』（65年）にオマージュを捧げたい気持ちがよくわかる。その結果生まれた、『柔道竜虎房』（04年）は面白かったし、本作も第37回香港電影金像獎で6部門にノミネート！

そんな最新の話題作を、私は第13回大阪アジア映画祭で関係者の一人として鑑賞。一人娘のヒロインがくり広げる猛特訓と死闘は、私が2017年の邦画ベスト1に挙げた『あゝ、荒野 前篇・後篇』（17年）には及ばないが、この試合が彼女の人生の転機になったことはまちがいない！

2017年大晦日の『RIZIN』での女子選手の活躍を思い出しながら、ヒロインの今後の人生を温かく見守ってやりたい。



■大阪アジア映画祭で香港最新の話題作を鑑賞！■

2017年の第37回香港電影金像獎で、主演女優賞（ステフィー・タン）、助演男優賞（倉田保昭）等6部門にノミネートされたのが本作。ステフィー・タンは、香港で空手道場を開いている空手家の父・平川彰（倉田保昭）の一人娘・平川真里役で、なんともみずみずしい演技を見せてくれる。今年3月に開催された第13回大阪アジア映画祭では、私が制作協力をした藤元明緒監督の『僕の帰る場所 Passage of Life』が上映されたため、私もゲストの一員としてそこに招待された。そんな事情もあって、同映画祭の「コンペ部門」に出品されていた本作を鑑賞することに。

香港のジョニー・トー監督の『柔道竜虎房（柔道龍虎榜／Throw Down）』（04年）は、黒澤明監督の『姿三四郎』（65年）にオマージュを捧げるべく作った、香港の「柔道映画」だった。そしてそこでは、姿三四郎vs 檜垣源之助ばりの、林立する香港の高層ビルをバックにした野外での柔道対決が見物だった（『シネマルーム17』90頁参照）。しかして本作でも、冒頭にもみる、風吹く荒野で空手着に身を包み、見事な空手の型を披露する平川の凛々しい姿に注目！

アジア映画祭での上映のために来阪したチャップマン・トー監督は、上映後会場からのさまざまな質問に答えていたが、そこで彼はハッキリ本作で黒澤明監督の『姿三四郎』へのオマージュを捧げたことを告白。なるほど、なるほど・・・。

■□■勝手に『チョコレート・ファイター』を想像したが■□■

タイのムエタイ選手であるトニー・ジャーを主演させた『マッハ！（MACH）』（03年）（『シネマルーム6』194頁参照）と、『マッハ！弐』（08年）（『シネマルーム24』194頁参照）は面白かった。しかし、それ以上に面白かったのが、“映画史上最強の美少女” ジージャー・ヤーニン・ウィサミタナンを起用した『チョコレート・ファイター』（08年）（『シネマルーム22』173頁参照）だった。そこで、本作の簡単な紹介記事を読んだ私は、勝手に本作は美少女ステフィー・タン扮するヒロイン・真里が空手で大暴れする映画だと想像していたが、本作中盤までそれは大ハズレ。少女時代に父親から厳しく空手を仕込まれた真里はそれなりの型を見せてくれるが、父親が勝手に申し込んだ昇段試験に落ちてからは空手がイヤになっただけ。そのため、真里と父親との仲も日々険悪に・・・。

そんな状況下のある日、真里が道場兼自宅に戻ってみると、道場内で1人倒れ死亡している父親を発見。もう少し父親に親孝行をしておけば良かったと後悔したが、もはや後の祭りだ。こうなれば、たった一人の相続人である真里は、唯一の相続財産である道場兼自宅をアパートに改装して賃貸し、その収入で生計を立てようと計画。真里はその旨をマッサージで生きていこうとする親友ペギー（ダダ・チェン）に打ち明け、そのとおり計画したが・・・。

■□■父親の遺言は？真里の猛特訓は？■□■

本作のヒロイン・真里は最初から登場するが、もう一人の主人公であるチャン・キョン（チャップマン・トー）が登場するのは本作中盤から。父親の一番弟子だった彼は、使い方によっては凶器にもなる空手を、あることに「悪用」したことによって破門されていたらしい。そのため、本作で一番弟子として平川に仕えているのは口の利けない弟子だが、本作では父娘もその弟子も含めてヤケにラーメンを食べるシーンが多いので、それにも注目！

それはともかく、父親の死後弁護士に呼び出された真里は、そこで父親の遺言書によっ

て自分の相続分が49%しかなく、チャンに51%が相続されると聞いてビックリ。なぜ父親はそんな遺言を・・・？それはきっと、空手の道場を閉めずに続けてほしいと願う平川の気持ちの表れだが、それによって賃貸収入でこの先気楽に生きていこうとした自分の計画がオジャンになった真里は不満タラタラだ。

他方、道場を盛り返そうとするチャンは、近所の子供を呼んで道場を再開したが、朝っぱらから子供たちの掛け声に起こされる真里はそれによってますます不機嫌に。そんなふうにチャンと真里の対立が深まる中、チャンは真里に対して「K-1の試合に挑戦し、最後まで立っていられたら、自分は相続権を破棄して潔く道場から出ていく」と宣言したため、真里はその試合への出場を決意することに。そこで、以降、『ロッキー』シリーズ後半の定番となっている、決戦本番に向けての猛特訓が真里にも始まることに。最初は腕立て伏せもろくにできなかった真里だが、さあ、チャンたちの指導よろしきを得て、真里の猛特訓は如何なる進展を・・・？

■□■いざ勝負！真里のファイトぶりはイマイチだが・・・■□■

2017年の第41回日本アカデミー賞は、『三度目の殺人』（17年）（『シネマルーム40』218頁参照）が作品賞、監督賞等最多6部門を受賞した。しかし、私が2017年のトップワンに推した邦画は、断然『あゝ、荒野 前篇・後篇』（17年）だ。同作に見るボクシングのファイトぶりは、『ロッキー』シリーズのそれに勝るとも劣らないすばらしいものだった。

それに比べると、本作に見るK-1の試合での真里のファイトぶりは、「女同士の対決」ということを割り引いても見劣りすることは否めない。ちなみに、私は近時大晦日の夜は紅白歌合戦をほとんど観ず、フジテレビの『RIZIN』やTBSの『KYOKUGEN』ばかり観ている。2017年大晦日の『RIZIN』で見た女子スーパーアトム級トーナメントにおける、RENA vs アイリーン・リベラの試合、浅倉カンナ vs マリア・オリベイラの試合は大いに見どころがあった。それに比べると、本作のそれは映像上のテクニックをいかに駆使してもイマイチ・・・。そのうえ、勝負の結末は最初からわかっているから、残念ながら本来本作のクライマックスとなるべき、真里のファイトぶりはイマイチと言わざるをえない。

もっとも、本作では顔にいっぱいあざを残しながら道場兼自宅に戻ってきた真里の、新たな自分との向き合い方が真のテーマなので、それに注目！

2018（平成30）年3月26日記